



野営地にて

11月30日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

11月30日のおはなし「野営地にて」

ゆるやかに続く道の向こうに、ぼんやりと姿が見えてきた。城塞都市の姿だ。森を抜けてからというもの、ずっと人の手の入った様子がない原野が延々と連なっていたのだが、ここに来てどうやら人里が近くなってきたような気配がある。道の両脇の景色は変わらないものの、道そのものの様子が変わってきたのだ。雑草の数が減り、踏み固められ、そして凹凸がならされて歩きやすくなってきた。もうじき畑が姿を現すだろう。あるいは家畜の放牧が見られるようになるだろう。

間もなく小綺麗な橋が見えてきて、我々は小川に着いた。夕闇も迫る頃だったので、今夜はここでキャンプすることにした。橋のすぐわきには川べりまで降りる階段がついていて、そこはどうか洗濯したり野菜を洗ったりするための水場として使われている様子だった。冷たい水で顔を洗い、布を絞ってざっと汗を拭い、さっぱりしたところで水を汲み、土手の上の平らなところに火をおこし鍋を火にかけた。

夕日が沈む頃、ちょうどシルエットになって城塞都市が黒々と浮かび上がった。都市のまわりをぐるりと城壁で囲まれているようで、中にはあまり高い建物はないらしい。こちらから見ると城壁のところどころの物見櫓のような小さな塔を除くと、それはほとんど真四角な長方形と書いていいようなずんぐりした姿をして見えた。このあたりにそんな都市があるとは聞いたことがないが、もちろん我々がこのあたりを熟知しているわけでもないから、特に不思議には思わない。

肉と野菜を手頃な大きさに切って適当に鍋に放り込み、塩とコショウで味付けして、3人で分けた。朝からほとんど休憩を取らずにぶっ通しで歩き続けの1日だったので、我々は話もせず黙々と食べ、それぞれ満足して食べ終わり食器を重ねる。ポケットフラスクに入った酒を回し飲みし、フラスクを入れた袋のことでいつもと同じジョークが交わされるが、ものの3口も飲んだところで眠気に襲われたちまち眠ってしまった。

数人の男たちが激しくドアを叩く音を聞いて、ぼんやりと目が覚めそうになる。家のドアをガンガン、ガンガンと殴りつけ、中に押し入ろうとしているように聞こえる。どう考えてもうちに関係があるとは思えない。どこか別な家と間違えているのだ。眠いのにも、そんな迷惑なやつらの相手をしなくてはならないことを腹立たしく思う。頭の芯がひどく重たく、起きたくても起きられない状態でぐずぐずしていると、ドアを叩く音はますます激しくなり、気がつくやいなや居間のベランダの方からも怒鳴り声がある。押し入ろうとしているのだ。そんなに騒いだら子どもたちが目を覚ましてしまうではないか。

腹を立てて、眠いのをこらえて無理やり頭を振り、起きあがろうとする。うまくいかない。からだがかわばって動かない。金縛りだと気づく。けれど次の瞬間、金縛りは解け、首の向きを変え、目を開くことに成功する。そこは野営地で目の前の焚き火は小さくなってはいたがまだ燃えている。焚き火の向こうで見張り番をしていた仲間が、気配を察してこちらに振り向く。どうした。そしてこちらの様子を見つめて続ける。悪い夢でも見たか。ひどい顔をしているぞ。

首が痛い。妙な角度にねじれていたようだ。目を動かすと頭の中でザザッと何かを激しく摺り合わせるような音がある。まばたきしてもザザツという。あいつらは、と口に出してから、それが夢だったことに気づく。いや、何でもなし。金縛りになりそうだった。鎧を着た騎士でも出てきたか。いや、そんなものは出てこなかった。またあの夢か。ああ、またあの夢だ。

家族が殺されたその晩、おれは家にいなかった。だから賊がそんな風に押し入ってきたのかどうか分からない。けれど何度も繰り返されるこの夢には何か意味があるはずだ。あのザザツザツという音にも。それだけを手がかりに探し出すしかない。

見張り番が言う。交代できるか。ああ。交代しよう。例のあのフリフリバッグの酒はまだあるかい？ フリフリバッグというのはフラスクを入れた袋に対するおなじみのジョークだ。ある

とも、さあ。おれは袋からウイスキーの入ったフラスクを出すと相手に渡す。そして空になった袋を握りしめ、その感触を確かめる。いまではもう手垢で真っ黒になってしまったが、元は真っ白なレース編みの袋だった。おれの誕生日に娘たちがくれた小物入れだ。

(「レース編み」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

野営地にて[SFP0153]

<http://p.booklog.jp/book/39866>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39866>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39866>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.